令和４年度

学校関係者評価報告書

令和４年12月２日(木)

学校法人　宮崎総合学院

宮崎情報ビジネス医療専門学校

令和４年度第１回「学校関係者評価委員会」報告について

宮崎情報ビジネス医療専門学校では、平成23年度より、教育内容や日々の学校運営に関する業務について点検し、更なる改善、向上を図るため、自己点検・評価に取り組み、平成24年６月（第１回）、平成25年７月（第２回）に、学校法人宮崎総合学院のホームページ上で公表いたしました。

更に、本年度は文部科学省の「職業実践専門課程」に係る公示に併せて、学校単体での「学校関係者評価委員会」を開催し、本校に関係の深い病院関連や企業関連の方々に、本校の教育活動や学校運営に関してご意見、提言等をいただき、今後の学校運営や評価の在り方について、より良い改善を図っていくことといたしました。

今回、令和４年度第１回「学校関係者評価委員会」を開催し、令和３年度に続き貴重なご意見、ご指摘を頂きました。ご意見・ご提言をいただいた皆様にもあらためて感謝申し上げます。

今回、令和４年度の評価結果を真摯に受け止め、今後とも、業界、地域、学生のニーズに応えられる学校運営を目指し、教職員一同努力して参る所存であります。

引き続き一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

令和４年12月
宮崎情報ビジネス医療専門学校
校長　　花　盛　　和　也

１．「学校関係者評価」の実施方法について

今回の「学校関係者評価」は、文部科学省が策定した「専修学校における学校評価ガイドライン」を踏まえた評価項目に沿って実施した、「令和元年度自己点検・評価報告書」について、本校に関係の深い企業等 11 名の評価委員（委員一覧表）に評価していただいた。

評価委員からの意見は、本校で組織する自己点検・評価委員会委員長（校長）及び教職員が承り、その評価結果の内容等について要約の上、報告書として取りまとめた。

自己点検・評価報告書（令和 3 年度版）と併せてご覧頂きたい。

２．学校関係者評価委員一覧表

評 価 委 員 敬称略	会社（企業）名	役職名	任　期	備　　考
川崎　友裕	一般社団法人 宮崎県情報産業協会	会長	R5.3.31	㈱MJC 社長 （欠席）
小田　真司	株式会社　クラフ	エンジニア	R5.3.31	
甲斐　英治	株式会社 フェニックスシステム研究所	執行役員 管理本部長	R5.3.31	
鈴木　斎王	宮崎診療情報管理懇話会	会長	R5.3.31	宮崎大学医学部付属病院 副病院長（欠席）
丸山　博史	社会医療法人同心会 古賀総合病院	事務部部長	R5.3.31	
丸山　こずえ	独立行政法人国立病院機構 都城医療センター	副部長	R5.3.31	
田辺　邦晃	株式会社坂下組	総務課長	R5.3.31	
阿波部　康志	株式会社 ニューウェルシティ宮崎	総支配人	R5.3.31	
下苙　敏徳	宮崎県幼稚園連合会	副会長	R5.3.31	学校法人三育学園 光が丘幼稚園　理事長
小森 春美	学校法人福原学園 野の花幼稚園	副園長	R5.3.31	
岩切　朝樹	株式会社デンサン	部長	R5.3.31	卒業生

３．委員会次第（概　要）

（１）開会

（２）校長挨拶

省略

（３）委員長選任

丸山博史委員を委員長に選出した。委員会規則により委員長が議長を兼任する。

（４）令和３年度　委員会議事録確認報告

省略

（５）令和３年度　学校自己点検評価報告

教務部長より、各項目についての報告を行った。

（６）討議・意見交換

各評価委員から、報告に対するご意見やご指導をいただいた。

（詳細は後記のとおり）

（７）閉会

４．討議・意見交換について

各評価委員から、前回ご指摘いただいた項目についてご意見やご指導をいただいた。

◇ 評価項目１　建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

・特に意見なし

◇ 評価項目 2-15　（企業・施設での現場実習）

・カリキュラムの中にあれば必然的にやるが、自発的にもやってほしい。どのような仕事をするのかというのがわからない学生たちが多いように感じる。そのような意味でも、実習とまでいかなくても、見学などでも実施したほうが将来のためにはなると思う。就職でもただ順番に受けていて合格したところに行くというよりも、ここを受けたいとか目指したいとか、そのような意味では、施設見学なども必要ではないかと考えている（丸山委員）

・総合ビジネス科は将来目標が決まっていない学生が多く、特定の場所で職場実習を受けるのが難しいと考える。宮崎県の教育庁に「アシスト事業」という学校と企業の橋渡しをするようなウェブサイトがある。学校に赴いて職業の説明をしたり、職場体験を受け入れたりできる企業のリストがあるので活用してみたらどうか（田辺委員）

◇ 評価項目 2-20　（他の高等教育機関との連携講座）

・高校とは連携を取れているが、大学などの高等教育機関についてはまだやり取りができていない。高校生が来校してコンピュータの勉強をしたり、こちらから出向いて講座を開いたりするほか、挨拶でも話をした文部科学省の委託授業のなかでも、連携している企業の方も一緒に高校へ行って話をしてもらったりしている（花盛校長）

◇ 評価項目 2-26　(非常勤講師との定期的な情報共有について)

・非常勤講師との情報共有は実施しているか（丸山こずえ委員）

⇒現在は個別に意見交換を実施している。科によっては何人か集まって開催しているが、本来であれば顔合わせの意味で講師会を実施するが、コロナ禍ということもあり現在はできていないので、個別に先生方から現状や今後についての話をさせてもらっている（樋口委員）

⇒日本語科と国際ビジネス科の方は年２回実施している（花盛校長）

◇ 評価項目 2-25
(専門性や指導力などの維持や向上のための自己啓発への時間的・財政的な支援について)

・世間の動きが非常に激しく技術も日進月歩のなかで、自分のことに目を向けてもらうような計画が必要だと思う。特に今はオンデマンドやウェブ研修などが非常に流行していて、病院でも出張費を出さずに自分の好きな時間に研修を受けてもらうような感じで、ただしノルマのようなものは与えて研修してもらっている。先生方にはそのような機能はないのか（丸山博史委員）

⇒新任者研修などは研修計画を作成して実施した。学園全体での研修などもあるが、なかなか中堅教員に向けた研修というところが薄いので３の評価としてあり、このようなところが今後の課題だと思う。ただ、スポット的にオンラインでの研修も受けているので、それを年度計画の中でどのように捉えていくかということも今後の検討事項と考えている（馬場顧問）

・数字で表されると、やってないような感じがする（丸山博史委員）

⇒全体的には実施していないという評価であり、新しい先生方には実施している（馬場顧問）

⇒計画を立ててやっていないという意味での評価でもある。文言を「資質向上のための研修を行っているか」という質問に変えると違ってくる気がする（花盛校長）

⇒研究授業も継続的にやってはいる。ただ、全領域・全年齢を網羅しているかというのは課題である（馬場顧問）

・宮崎県警と協力して、サイバーテロ対策教育のようなものをクラフのオフィスを提供して実施したりしている。学生に対しても、職場体験実習のようなこともできるし、社会人としてのリテラシーとして必要になってくるようなこともできる。今であれば８割から９割がオンラインで業務をしていてオフィスの貸し出しもできるので、相談してもらえれば協力もできると考えている（小田委員）

◇ 評価項目 3-3　（図書室・図書コーナー等があるか）
評価項目 3-4　（学生が利用可能な参考図書、関連図書は備えらえているか）

・先ほどの情報と保育の違いなどを聞くと、生徒が自主的に勉強するための情報源にアクセスできる環境があるというような方向性の文言は学校として必要だという気がしているが、それが必ずしも本だったり、図書室である必要はないのではないか（田辺委員）

・今の時代であれば、例えば録画したものをいつでも観れるようにしたり、授業をそのまま残しているものを YouTube に上げて限定視聴できるようにするなどすれば、場所はもういらないのではないか。電子書籍でも良いし、電子黒板のデータが保存されたものが閲覧できるようにするのも良いと思う（小田委員）

・現実的には、学校開設の用件として図書室が必要であったりする。特に看護系や保育系はそうだと思うが、そうでないところで今の時代のアイテムを使ってどのようにやっていくのかという提案だと感じる（丸山博史委員）

・保育の実習に来る学生などは、本を自分で買うことがなかなかないと思うので、子ども未来科には必須だと思う。ただ、現在ではネットで検索することも多くなってきているので、図書室という表現ではなく、情報が習得できる場所があるかという文言でも良いのではないか。ただ実際に手に取ってみることも大切だと思うので、備え付けはしていて欲しいと考えている（小森委員）

・この項目については検討をお願いしたい（丸山博史委員）
⇒今いただいたヒントを織り交ぜて項目を作りたい（樋口委員）

◇ 評価項目 4 教育目標の達成度と教育効果

・特に発言なし
学生制作動画を入賞作 2 本上映
（宮崎ブーゲンビリア空港デジタルサイネージ、選挙啓発ＣＭ

◇ 評価項目 5-11　（メンタルヘルスについて）

・臨床心理士にいつでも相談できる体制と言うのは、学生が希望したらすぐに行けるのか手続きが面倒だったりすると行かないのかなと思うが（丸山こずえ委員）
⇒法人に臨床心理士が配置してあるが、いつでも予約が取れるわけではなく、先延ばしになる（樋口委員）

・就職してもメンタルが壊れてすぐにやめる学生もいるので、学校のなかで少しでも強化してもらえたらと思っている。看護学校などであれば常駐していて、学生が好きな時間に言って相談できる体制がある（丸山こずえ委員）

・学生に対する年１回のストレスチェックを実施して、高ストレスになった学生への個別のフォローを実施するなど、企業でやっているものに取り組んでも良いかと思う。予防として実施するということ（甲斐委員）

・利用の実績は無いということか。現状で何人くらい利用しているか（丸山こずえ委員）
⇒本校だけだと２・３人くらい（樋口委員）
⇒法人全体の学生が利用するので、なかなか予約が取れない（花盛校長）
⇒加えて、臨床心理士では手に負えない状況だと分かると受診を勧められるが、受診の予約もなかなか取れない。結局は先延ばしになって悪化するパターンもある（樋口委員）

・一番大切なところかなと思うが（丸山こずえ委員）

・今はオンラインの影響か、素振りが全く無かったのに突然辞めたりするので、どちらかというと自己治癒力のようなものを高める方法を教えるのも良いのでは。自分の考えがマイナスに働いているような部分を、自分で見つめて改善できるようになると良いのではないか。完全にオンラインになっている状況では、ストレスチェックでは間に合わない。カウンセラーも良いが、あまり効果的に働いていない現状であるならば問題だなという感じがある（小田委員）
⇒高校生なら専門の試験があり、心理的内面や学力、本人の傾向などが分析できるので、担任が対応できる。しかし専門学校生にはまだ対応していない（馬場顧問）

・SPI を全員に受験させても良いかもしれない。SPI なら傾向が見えてくるので、情報として持っていると先生側からのアクションに利用できるかもしれない（小田委員）
⇒朝のあいさつをしながら学生たちに声を掛けるが、挨拶をしても返せないとか、こちらは向けないとか、いろいろな状況は確かに増えている（馬場顧問）

・いつでも誰でも、というのはなかなか難しいと思うが、相談できるところはあった方が良い。専門家でなくても、ちょっと話を聞いてもらうようなところ。いきなり相談するのではなく、いったんクッションとなるような存在がいるのであれば、専門家の受診まで待っても良いケースもあると思う（下芝委員）

◇ 評価項目 6-1　（ボランティア活動）

・学生がボランティア活動をする機会も少ない。強制的にやった方がよいのか（丸山委員）

・会社では、新入社員が大淀川のいかだ下りや青島太平洋マラソンなどになかば強制的に参加する取り組みをしていた（甲斐委員）

・駅前の清掃を行っていた（小田委員）

・毎月の清掃が最も取り組みやすいと思うが、それを学生たちに強制できるのか。

・会社だと、新入社員が強制的に参加させられている（岩切委員）

・学校の授業の一環ではないので、学校も休みや授業前などを使うことになる（阿波部委員）

⇒今の学生は土日に出てくるのをとても嫌がるうえに、アルバイトが必ず出てくる。アルバイトと学校の授業ではアルバイトのほうが大切と言われることもあり、なかなか難しい場面もあるが、青島太平洋マラソンやえれこっちゃについては、希望を募ってどれくらいの希望者がいるのかを把握するところから検討してみたい（樋口委員）

⇒現在は、医療系の学生が採用試験で聞かれるから学校が主導して参加しているような状況なので、健全な形で調査をして進めて行ければ良いと考えている（樋口委員）

⇒)献血はサザンの駐車場にバスが来るが、情報だけを流している（馬場顧問）

・保育園などもあるので協力してもらったらどうか（丸山委員長）

・ボランティアで交流することによって学生の横のつながりができれば、打ち解ける仲間も見つかってメンタル的なものも改善できるかもしれない（小森委員）

・自主的な活動が難しいのであれば、文言にある「社会的活動」に目を向けて社会の中に入って活動するということにすれば、もう少し情報の整理ができるのではないか（田辺委員）

◇ 評価項目 7-5　（防災訓練）

・先生方は通報訓練や非常口の位置の確認はしているのか（丸山委員長）
⇒地震の際に外階段を使わないというようなことは理解している（樋口委員）

◇ 評価項目 8-8　（物品等の在庫管理の実施）

・ネットワーク系の機器は在庫管理のシステム化を進めている。消耗品などがまだできていないので、予算を掛けながら取り組んでいるところである（馬場顧問）
⇒以前に１万円以上のもので良いのではないかという意見もあったので、文言の変更も含めて検討する（樋口委員）

・減価償却が必要なものだけで良いと思う（小田委員）

以上の意見を頂き閉会した。

ー以　上ー